

『行ってみないとわからない』事がある。

- ・ “モンゴルは日本と2度も戦争をして、両方とも勝利した”というのがモンゴルの常識である事、
- ・ シリア人の多くが大の親日家である事
- ・ エジプトのピラミッドは砂漠のど真ん中にあるのではなくて、すぐ側までマンション？が迫っている事
- ・ イラン・パキスタン・インドではスキーができる場所もある事・・・、

などなど挙げたらきりが無い。

こうした事は教科書には書いていないし、なかなかニュースでもお目にかからない。『行ってみないとわからない』のだ。

また、ニュースでお目にかかっても、『行ってみないとわからない』事がある。情報の操作がある場合だ。

イラクで殺された青年が、何故イラクに行ったのだろう？という私のメールに何人かの友人が、『アメリカからの情報しか入って来ないが、それは操作されている。だから現地に行って、自分の目で確認したかったのではないだろうか』

という趣旨の回答をくれた。

事実そうなのかもしれない。

“アメリカの情報操作と大衆誘導はすごいものがある”と、知り合ったヨーロッパの青年も言っていた。

しかし、一方で『行ってしまうとわからない』事もある。チベット問題である。

ダライラマが1989年にノーベル平和賞を受賞し、ブラッドピットの『セブンイヤーズ・イン・チベット』という映画が流行ったので、【チベット】に関して全く知らないという日本人はいないだろう。少なくとも【チベット】を、“ああ中国の奥の方ね”という事は知っていると思う。ただし、実際にその“中国の奥の方”、中国のチベット自治区に行ってしまうと、本当の【チベット】は見えてこないらしい。

去年モンゴルを旅して、チベット仏教には興味を持っていた(モンゴルはチベット仏教の影響が強い)。

いつか是非チベットに行ってみたいと思っていた。そして再びアジアに戻ってきたので、パキスタンかネパール辺りからのアプローチを少々検討してみたが、その中心地ラサは標高が3600メートルもあって、冬の間には旅するには過酷すぎるってことで結局は断念。

ただ、インド北部の都市【ダラムサラ】という場所へ行けば、むしろ本当の【チベット】が見えてくる、と勧めしてくれる人がいて、この地にやってきたのだ。

チベットという国

そのダラムサラにやって来て直ぐに知ったのは、

- ・ チベットと言うのは一国の名前である。



- ・ 本来のチベット国のエリアは、中国政府の言う「チベット自治区」とは違う。
- ・ 中国政府の言う「チベット自治区」は、広大なチベットの 3 分の 1 に過ぎず、本当のエリアは、インドの 3 分の 2 という広大な土地である。
- ・ ダラムサラは、そのチベット国の亡命政府がある場所で、ダライラマとチベット難民が住んでいる。
- ・ 中国のチベット自治区では、ダライ・ラマ法王を支持したり、その肖像を拝むことを、公私の区別なく厳禁とされている。

という事だった。

いつものように、その国の概要を書くとこんな感じ。

1.面積 : 250 万平方キロメートル(インドの 3 分の 2)。

「チベット自治区」は 120 万平方キロメートル。

チベットの大部分は「チベット自治区」の外側に広がっている。



2.人口 : チベットに 600 万人。209 万人はチベット自治区に住んでいる。その他はチベット自治区以外のチベット人地区に住んでいる。

3.首都 : インドのダラムサラにチベット亡命政府を樹立している。

4.人種 : 住民の多数はチベット民族

5.言語 : チベット語

6.宗教 : チベット仏教やボン教

7.識字率 : およそ 25%

8.略史 : 7 世紀 古代チベット王朝成立(唐と対等にわたりあう強大な軍事国家)

13 世紀 元との宗教的な師弟関係

18 世紀 清王朝との関係

1949 年 チベット政府は、毛沢東にチベットの独立の立場を述べる(が中国により侵略が開始される)。

1951 年 中国共産党により、チベットに「17ヶ条平和開放協定」を結ばされる。

1959 年 ダライラマ 14 世インドに亡命。チベット亡命政府を北インドのムスーリに樹立。

1960 年 チベット亡命政府の拠点をダラムサラに移動。

1966 年 毛沢東の文化大革命により、チベットで死と破壊の波。

1984 年 中国による侵略と占領の結果、120 万人のチベット人が死亡した、とチベット亡命政府が発表。

1989 年 ダライラマがノーベル平和賞授与

1990 年 中国が、チベットへの戒厳令を解除

(“国の概要”は、いつもは外務省の HP を参考に・・・、というか、そのまんまですが、チベット国についてはさすがに無いので、見聞きした内容をまとめてみました)

ダラムサラという街

ダラムサラに到着したのは、もうかなり遅い時間であった。

ダラムサラには、チベット仏教の信者の他に、チベット仏教に興味がある人、チベットを感じたいというヨーロッパ人、インドカレーに飽きたという日本人がたくさん訪れるという話を聞いていた。今はオフシーズンなので、宿は何とかなると思ってはいたものの、やはり夜になって新しい街に到着するのは、いつも不安で嫌な感じである。

ダラムサラの小さい、けれど賑やかなバススタンドで長距離バスを降りると、歩いているのは日本人ばかり。ホっとした。

しかし・・・『すみません、どこかにいい宿はありませんかねえ』と聞くと、『???』という顔をする。

実は、歩いているのは日本人ではなくて、チベット人だったのだ。

中国人や韓国人は、何となく識別できるが、チベット人は、顔の作りがまるで日本人そっくりである。

ここダラムサラに、とても多くのチベット人がいるって事は承知していたが、エンジ色の袈裟を着ているチベット僧や民族衣装のチベット人をイメージしていたので、ジーンズにジャンパー姿の若者なんかはもう全く区別が付かない。

ダラムサラという街は2つある。ロウワーダラムサラとアッパーダラムサラの2つ。

インド政府からチベット亡命政府の拠点を置く事を認められて、チベット人が新しく建設した街がアッパーダラムサラで、インド人よりもチベット人の方が目立つ場所だ。マクロードガンジーとも呼ばれている。

この2つの街は距離10キロ、標高差が500メートルもあり、両街を結ぶバスの便はそこそこあるものの、別の街という感じを受けた。マクロードガンジーは、フンザと同じように険しい山の中腹にあって、土地の広がりがないせいか想像以上に小さな街だった。

バススタンドの広場から二本のメインロードが並行して伸びていて、そこを中心にお土産屋、レストラン、ホテル、ネットカフェ、旅行代理店などがひしめいている。

といってもメインロードの長さは300メートルぐらいなので、ここに1週間もいれば、全ての店をチェックする事が可能というほどの街なのであった。

ナムギェル・ゴンパ

【ゴンパ】とは、チベット仏教の僧院である。チベットには当然の事、インドやネパール、ブータンにも数多くのゴンパがあるそうだ。

ラサにあるポタラ宮殿には遠く及ばないものの、このダラムサラには、チベット亡命政府拠点にふさわしく立派なゴンパがある。そしてダライラマ14世の公邸もここへ移設されている。

中国のチベット自治区へ行った事のある人に言わせると、ここの建物は鉄筋コンクリート作り



チベット僧のお祈り。履いている靴下はなぜかナイキ。そしてこの僧侶、実は女性。女性でも頭を剃っている。

で、そして新しいがゆえに、あまりチベットらしくないらしい。

確かに僧侶達の住んでいる場所などは、どこかの会社の寮みたいな作りで、エンジ色の袈裟を着た僧侶が出入りしていなければただの集合住宅に見えてくる。

ただ、本堂に響くお経の声、揺らめく蠟燭の火と線香の煙、神秘的な壁画は、神聖で重厚な感じがする。

僧侶達はここで熱心にお祈りをする。

朝の4時から6時まで教義問答をするらしい。この教義問答は、野球のブロックサインみたいな手振りをする。ちょっと変わったダンスにも見える。

宿に近い事もあるが、何だかひかれるものがあるって、私は何度も何度もこのゴンパに来ている。因みに入場料などはもちろんなく、チベット難民達のみならず、そして近所のヒンズー教徒やイスラム教徒の人たちも散歩がてらに気軽に訪れる場所みたいだ。

信者が熱心に、そして全身を使って長い時間お祈りをしているのがとても印象的だ。



信者が熱心にお祈りをしている。うつ伏せになり頭の上で手を合わせ、起き上がるという動作を繰り返す。

ドラマは、世界平和と現在のこのチベット問題を訴えるために、世界中を回っているらしい。ほとんどこの公邸にもいない。

インドの女子学生が、ここに見学に来ていた。その格好からヒンズー教徒だと思うが、嬉しそうにマニ車を回していた。

マニ車というのは、経文の書かれた筒で、それを回せば長い経文を読んだ事になり、功德が得られるというものらしい。

楽しんで功德を得てしまっているのか、と思わないでもないが、女子学生の後だとさらに功德が得られるような気がするので一応回しておいた。回すうちに、あれっこれと同じようなものを回した事があるなあ、などとデジャブ的な境地に。

もしかすると、輪廻転生の中でドラマだったのかと思ってみたが、日本のお寺にもあるんだらうな、きっと。

僧院の本堂には巨大なマニ車もあって、一回転するたびに鐘が鳴るように作られていた。何だか有り難い気もする。



ヒンズー教徒の女子学生が、チベット寺院を見学している風景。楽しそうにマニ車を回していた。

チベットミュージアム

この僧院には付属のミュージアムがある。

中国がチベットに対して、如何にひどいことをしたのか、という内容の展示だ。

因みに中国の侵略の結果、チベット人は120万人も無くなっている。主として中国人による拷問死および刑死、そして戦死、餓死……………。

お寺の中にあるミュージアムなので大した事ないと思っていたが、2階建ての建物の中には、多くの写真が綺麗に粛々と展示してある。英語とヒンズー語とチベット語で解説されている。

ちょっと高いが、ガイドブックも売っていて、私は今まで全く知らなかったチベット問題を知る事となる。

そのガイドブックは

『A Long Look Homeward』

と題されていて、56ページ、カラー写真入りのしっかりとしたものである。

ガイドブックの冒頭では、直面する2つの脅威があると指摘している。

1つは現実的に直面しているチベット人の死であり、様々なダメージであり、貧困であり、苦しい亡命生活といった事。

もう1つは、記憶の消滅であるという。つまりチベットの文化や伝統、歴史、過去の出来事などが、時間の経過と共に消え去ってしまうという事だとしている。

ガイドブックの内容およびミュージアムで上映された記録映画、および見聞きしたチベット問題(中国に占領されているチベットの現状)を簡単に挙げていくとこんな感じになるだろう。

(1) 文化維持・信仰の自由

チベットの伝統文化・芸能の多くは仏教と結びついているが、中国共産党の唯物論が宗教を認めず抑圧政策をとっていて、その結果チベット固有の文化と伝統の維持が困難になっている。人民解放軍が宗教を“人民のアヘン”と言っていた文化大革命の時代、8000千以上あったチベット寺院の9割以上が破壊されたそうだ。

現在も条件付きの「信教の自由」によって、僧院活動が制限されている。

(2) 言論の自由

集会やデモが禁じられている。

何でも騒乱時に街頭にいと、チベット



チベット博物館の展示物。中国が如何にひどい事をチベットで行ってきたかを写真入で紹介している。



中国のチベット自治区では絶対に売っていない、『Free Tibet』のTシャツ。

人というだけで無差別に逮捕、投獄される事があるらしい。

チベット自治区では、

“フリーチベット”

などと叫べばたいへんな事になるらしい。

インドに売っている“Free Tibet”のTシャツは、当然ながらチベット自治区では売っていないのだった。

(3) チベットへの漢族移民

中国政府によるチベットへの漢族(いわゆる中国人)の大量移民政策によって、人口の逆転現象が起きてしまった(チベットで暮らすチベット人6百万人に対し漢族は8百万人近い)。さらに中国人の移民が奨励されており、一方チベット人は危険を冒して現在もなお亡命を続けているので、その格差はさらに広がっている(毎年1,000人以上の規模で亡命が続いている。因みにインドに亡命するには標高5700メートルを越えるヒマラヤ山脈を歩いて越えなければならない)。

チベットにおいて、チベット人はむしろ少数民族になりつつあるのだった。

(4) 教育問題

文化大革命による僧院の破壊により、教師の役割をしていた僧侶が少なくなった。一方、学校が中国政府によって与えられているが、学校では中国式の教育が行われており、もっぱら中国語で行われている。大学の試験も中国語。チベット人の子供は、たいへんなハンディを背負っている。

そして言語の問題のみならず、その教育内容も「漢化」につきる。チベット文化を教えるカリキュラムは一切無く、チベット人の親の中には、インドに亡命させて十分な教育を受けさせたいと願っている人たちもいる。

(5) 経済問題

チベットに移民する漢族に対して、色々な優遇措置が与えられている。一方、その労働者の流入によって、チベット人の大量失業が起こっている。

チベット人は、経済的困窮を強いられ、結果として「漢化」を強いられる。

(6) パンチェンラマ後継者

ダライラマは、チベットの6歳のニマ少年を、パンチェンラマ10世の転生者と認定したが、中国政府が、このニマ少年を連行し、他の少年をパンチェンラマ11世と認定した。ニマ少年と両親の所在は不明になっている(チベット仏教では、輪廻転生思想に従って、転生者を捜す事になっている)。



世界最年少の政治犯として中国政府に軟禁されているというパンチェンラマの写真とその不条理を訴える文章。

(7) 自然破壊

チベットでは、これまでに核実験を 30 回も行なわれている。そして核廃棄物の処理場を建設する計画もある。

またチベットの森林地帯が伐採されている。

以上は、主に亡命チベット側の主張である。中国側の意見にも耳を傾ける必要があるだろう。

中国人民解放軍は『チベットの虐げられている濃度を開放する為にチベットにやってきた』と主張していた(いわゆる農奴開放)。

そして現在も、封建階級によって奴隷状態に置かれていたチベット民衆を救ったという意味で、一連の軍事行動を今でも肯定的に評価している。

チベット問題に抗議するアメリカに対しては、リンカーンの奴隷解放と同じだと主張する。

また同時に、中国はあくまで国内問題である、と主張している。

しかし中国の人民解放軍がチベットに侵攻してくる以前からチベット国には政府があり、通貨も切手もパスポートも発行されていたし、軍隊もあった訳で、中華思想に基づいた考え方という気がするの私だけだろうか。

もしチベットが独立する事になると、55 もの民族による独立問題が巻き起こって中国全体がたいへんな事になると言われている。確かにそうかもしれない。

そして一衣帯水の日本としても影響が強いという判断、そして例によって中国への遠慮、もしくは中国からの圧力という事もあるのだろう。あまりチベット問題が日本で騒がれる事はない。

当然ながら、中国国内では、特にチベット自治区では、こうしたチベット問題が騒がれる事はない。情報も操作されている。

チベットの問題については、チベットに『行ってしまおうとわからない』のだ。

チベット政府は、ルーズベルト大統領から対日宣戦を誘われたが、ダライラマ 14 世が断った、という過去がある。日本は決して関わりの無い事ではない事を知った。

そして気づいてみると、私自身も過去に関わりの無い事ではないのだった。

中国政府が、チベット自治区を含む中国西部における未開発の資源を有効利用するために 1999 年から推進している国家プロジェクトで、『西部大開発』というのがある。商社は、こうした巨大プロジェクトに積極的に協力・参画し、ビジネスにしていくのが得意である。そしてそのメンバーとして私にも声が掛かった事があったのだ(当時はチベット問題など全く知らなかったが、別の理由でお断りしたが)。

チベット仏教は、殺生、窃盗、不和、邪念、陰謀、貪欲を厳しく戒める。私には、中国のやり方はその対極にあるような気がしてならない。

今となっては『西部大開発』に関わらず良かったと思っている。

つづく